



病棟のテディ・ベア

筑波大学人間総合科学研究科
小畑 文也・宮本 信也

研究の目的

- リサーチ・クエスチョン
- 小児病棟においてテディ・ベアは、子どもにとって、どのような役割を果たすのか。
- それぞれの役割において、どの程度有効か

配布に用いたテディベア

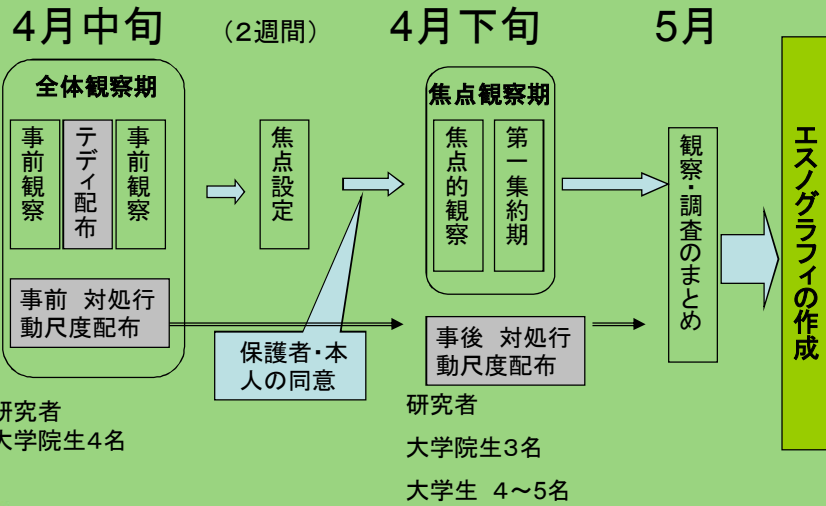


- 「Healing Bear(ヒーリングベア)」 NPO法人日本テディベア協会から寄贈されたもの。
- 光触媒レーヨン繊維を利用しており、殺菌・抗菌・汚れ(汗、皮脂など)分解作用がある。
- これをさらにオートクレーブにかけて配布。

具体的方法

- 行動観察・エスノグラフィーによる
エスノグラフィーとは、「現場に行って人々の行動を観察し、その行動をドキュメントに書き留めておき、ドキュメントを分析してさまざまな知見を得ようという一種のフィールドワークの手法である」。
今回はマイクロ・エスノグラフィに準拠して実施した。

タイムテーブル



結果と考察

- 小児病棟においてテディ・ベアは、子どもにとって、どのような役割を果たすのか。
- 「玩具」としてのテディ・ベア
- 「友人」としてのテディ・ベア
- 「道具」としてのテディ・ベア
- 「愛着対象」としてのテディ・ベア
- 「欲求不満のはけ口」としてのテディ・ベア

玩具としてのテディ・ベア

- 通常の「玩具」(たとえば、テディそのものを操作して遊ぶ)としての扱いは少ない。

ごっこ遊びの一員として参加することが多いが、特徴的なものとしては、メディカルプレイの対象として遊ぶケースが見られた。

エピソード1

- 児:「みてみてみて」(注射器)
児:「ちゅー」注射をする。
- 児:「これもあるよー」(体温計)
- 観:「これはどうやるの？」
- 児:テディの右脇に刺す。
- 児:テディに向かって「からだふきふきやろー！あんよぽちゃぽちゃやろー！」ガーゼを手に持ち、「からだふきふき、からだふきふき」背中、おなか、足、手を拭く。「あんよぽちゃぽちゃ、あんよぽちゃぽちゃ」ボウルに足をいれる。「あれ？ごわごわごわごわ…(何かを探す)」
母:「ごわごわしないからこれ(金魚の塩ビ)でいい？」
- 児:「金魚でごしごし！あー、さっぱりした！」

メディカルプレイ(病院ごっこ)

人形やおもちゃの医療器具などを使って医師や看護師になりきる「ごっこ遊び」。

意義： 入院している子どもは、「される」という受け身の体験ばかりをしている。「血圧を測られる」「血を採られる」「レントゲンを撮られる」「洋服を脱がされる」— このように「される」体験を、人形などに再現し「する」側に立つことで、子どもは自分が受けた検査や治療に対する克服感や自己の有能感を高めて自分自身を癒していく。また、ごっこ遊びの最中は、役割を演じることや人形を通して自分の気持ちを吐露することが多く、子どものもつ問題に気づくチャンスとなる(専門家の誘導が必要な場合が多いが、今回は自然に出ていた)。

友人としてのテディ・ベア

- 年少時の場合、特にぬいぐるみを中心としてベッドの周りに、(ぬいぐるみの)コミュニティを作る。今回の場合、新顔のテディが主役になることは少なかった。

役どころとしては、子どもにとって、中堅、あるいは2番手の「友人」(家来)として位置することが多い。これにはテディが「自立」できることも関係していると思われる。

エピソード2

- 児「きゃはは」→枕元から「しまじろう」のパペットを持ってきて、手にはめる。
- 児 テディに向かって「こんにちわー」「こんにちは、こんにちは、あれ？」「ぼくねーでんぐりがえしできない」
- 観「くまちゃん(テディにつけた名前)はできる？」
- 児 「しまじろう」を使ってテディを転がす。1回転させた後、羊の枕を取り出す。「しまじろう」手からはずす。ー 観察者が「しまじろう」を使う。ー
- 児 左手でひつじ、右手でテディを保持して両脇に置く。
- 児 ひつじとテディでお話(内容判聴不可)。
- 観 しまじろうで、ひつじをなでる
- 児 「ねえねえ ちょっとトラ やめてよ」
- 観 しまじろうで、テディにだきつく。
- 児 「うー」 ひつじをもってしまじろうにはたらきかける

「道具」としてのテディ・ベア

- テディ・ベアの機能上、手足が動き。固定できることから、様々なものを「持たしておいておく」という使い方が見られた。

ただ、一日中そのようにしているわけではなく、寝る時などに決まった形にして置いておくことが多い。

エピソード3

- 観 寝るときはどこに置いておくの？
- 児 ここ(枕元をさす)
- 観 ひつじさんと一緒なんだね
- 母 ナースコールを持たせてるんですよ
- 観 へー、看護師さん呼ぶの持たせてるんだ
- 児 そうだよ、こうして、こうして(テディの手足を動かす)、こうして寝てるの。くまちゃんが看護婦さん呼んでくれる。

「愛着対象」としてのテディ・ベア

- テディ・ベアを愛着対象としている子どもは年少児では比較的少なかった。小学校高学年、中学生の特に男児の中で愛着対象としている子どもが見られた。意外な結果ではあるが、テディ・ベアが他のぬいぐるみと違い「自立」するため、年少児にとっては、自分に寄り添うものではなく、自分と対峙するものとして捕らえているように思われる。

年長の子ども(特に男児)の場合、テディ以外にぬいぐるみのような、愛着対象に適した玩具が少なく、(要求することも無く、買ってもらうことも無い)そのため、配布されたテディが愛着対象になりやすかったと考えられる。

エピソード4

- 児（テディにDSを操作させて遊んでいる）
- 児（観察者に対して）お前しつこいんだよ。あっちへ行って。
- 観 テディを見に来ただけだよ。
- 児 ほい、とテディを投げる
- 観 あ、もらっていいの？
- 児 駄目！それはママ。
- 観 お母さん今いないのか。
- 児 4時まで来ない。それまでこれがママ
- 児 「ママ、ママ」といってテディを抱きしめる。

愛着

- 本来は子どもと養育者の間に形成される情緒的結びつきを指して言う。病院環境のように十分な愛着が得られないところでは子どもは自然に代理的な愛着対象を見出す。この愛着対象は、接触感の良いものが選ばれるのが通常であり、有名なハーロウの研究では接触の快感の方が生理的充足をもたらすものより愛着の形成に重要であるとしている。また愛着は主に乳幼児期において重要とされるが、その時期のみに機能するわけではなく、個体が自立性を獲得した後でも形を変えて存続するという。

「欲求不満のはけ口」としてのテディ・ベア

- 「攻撃性」の発露は、幼児期においては、通常の場合でも観察されることであるが、病院環境という、自分の意思で容易に変えられない環境においては、子どものストレスは高く、それを減じるための対処行動として攻撃が見られることは多々ある。この場合、子どもがもっとも対象としやすいのは、擬人化できる玩具であり、特に「自立」することで自分と対峙するテディ・ベアはその対象として好適である。

エピソード5

- 児:「あれ?なにこれ?」青の透明なボールを頭に載せる。「ふふっ」
- 観:「テディさんにもかぶせてあげて」
- 児:テディをもち、頭にかぶせる。「(笑いながら)見えない。見えない。宇宙人みたい」テディを回す「ぐるぐるぐるぐる」隣の男の子がテディをけているのを見る「こっちも、こっちも」「こっちもあるよーって」立ち上がり、手でばってんをつくる(何かのポーズ?)「〇※×#△&%…ビーム!キック、キック!」観察者の持つテディをける。踏みつける。「ちゃきーん」再度手で罰点を作りテディに向かってビームを出す。観察者がテディにおなじポーズを取らせると、チョップ。
- 観:「うわー」
- 児:テディを押しつぶす「どうだ!(笑い)」

配布時観察(分析中)

- 幼児から中学生にまで配布したが、ほぼ全ての子どもがテディに関心を持ち、8割程度の子どもが配布後すぐに遊びだした。15分以上遊んでいる子どもは18名中7名であり「親和性の高い」者とし焦点観察の候補とした。3名は配布後カーテンの中に入ったので観察は不可能であった。幼児は8割程度が強い関心を示したが、小学校高学年、中学生においては、関心を持つ者と、殆ど関心の無い者に2分された。

病棟の玩具としてのテディベアの特徴

- 可塑性(多用途性)がある→子どもによって「玩具」だけでなく、様々な使い方をする。
- 思いどおりに動くことから他者コントロール感が満たされる
- 長時間テディのみで遊ぶところは少ない。DS等で遊んで飽きた時間、心の隙間を埋めるような存在。
- 特に幼児にとって、テディ・ベアが「自立」できる事から、自分とは一定の距離がある存在、見守ってくれる存在と受けとめている。

2009年9月11日第2回配布

配布サンプル



好まれるテディの条件

- 第1回目:比較的大きめで、濃色系、玩具としての何らかの「機能」を持ったものが好まれていた。
- 第2回目:小さな淡色系、関節等のジョイントのない、一体型でシンプルなものが好まれていた。
- 1回目と2回目で子どもはほぼ入れ替わっているが年齢、性別等の構成に大きな差はない。
- 共通点は接触感覚